

儀礼空間の

必要性とはたらき

「入学式」「卒業式」「成人式」「結婚式」「お葬式」…。
私たちは、日常でさまざまな儀式・儀礼に接しています。

でも、それを単なる通過点として
見過ごしてきたのではないのでしょうか。

こうした儀式・儀礼そのもの、そしてその空間の
必要性やはたらきについて再考してみたいと思います。



うちだ たつる
内田 樹氏

凱風館館長
神戸女学院大学名誉教授
京都精華大学客員教授

講題 武道の道場空間と その指南力

道場とは超越的なものを招来し、調えられた心身によってそれを受け入れ、力としてまた叡智として発動するための場である。日本的な意味での道場というものが成立したのはおそらく鎌倉時代で、鎌倉仏教・能楽ともに日本固有のコスモロジーの発現と見なすことが出来る。「道場」の成立とその機能、さらにその消長について述べる。



しゃく てっしゅう
釋 徹宗氏

宗教学者
相愛大学教授
浄土真宗本願寺派如来寺住職

講題 儀礼に揺さぶられる

2000年の後半、日本では死亡者数が出生者数を上回った。人口減少社会、少産多死社会へと移行した。次いで2010年、「終活」がこの年の流行語大賞にノミネートされる。そして2011年、東日本大震災が起これ、非業の死に対する鎮魂や供養が求められ、埋葬や遺骨の問題も含めて、死者儀礼の重要性が浮上する。人間にとって、死者儀礼とはどのような行為だと考えればいいのか。浄土真宗にとって死者儀礼とは…。いろいろ考えてみたいと思う。

なかざわ しんいち
中沢新一氏

思想家・人類学者
明治大学野生の科学研究所所長

講題

葬送儀礼の「黄金比率」

死者と生者の間に適切な距離を創設するのが、葬送儀礼である。死者は危険な存在として遠ざけなければならない。かといって遠ざけすぎると、死者の恨みを買って災禍がもたらされかねない。生者の世界から遠からず近からずの距離に、死者はおさまっていて欲しい。その遠からず近からずの最適距離が、生者の世界からの「黄金比率」をもった場所である。この生と死との「黄金比率」を求めて、人間はさまざまに考えをめぐらした。



2月10日(金)

入場無料

※入場多数の場合、立ち見の場合もございます

2017年 受付 17:00

本願寺津村別院 (北御堂)

3F 本堂 地下鉄御堂筋線「本町」駅すぐ

- 17:50 開 会
- 18:00 講 演① 内田 樹氏
- 講 演② 中沢新一氏
- 講 演③ 釋 徹宗氏

シンポジウム 進行：寺本知正

「御同朋の社会をめざす運動」大阪教区委員会
重点プロジェクト推進部部長

21:00 閉 会

講師紹介

内田 樹（うちだ・たつる）

1950年、東京都生まれ。東京大学文学部仏文科卒業。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京都立大学人文学部助手、神戸女学院大学文学部助教授・教授を経て2011年に退職。現在、神戸女学院大学名誉教授、京都精華大学人文学部客員教授、昭和大学理事。神戸市内で武道と哲学のための学塾「凱風館」を主宰。合気道7段。

主著に『ためらいの倫理学』、『レヴィナスと愛の現象学』、『先生はえらい』など。『私家版・ユダヤ文化論』（第6回小林秀雄賞）、『日本辺境論』（第3回新書大賞2010）、執筆活動全般について第3回伊丹十三賞を受賞。

近著に『困難な結婚』、『世界「最終」戦争論』（姜尚中との共著）、『属国民主主義論』（白井聡との共著）、『転換期を生きるきみたちへ』（鷲田清一他との共著）など。

中沢新一（なかざわ・しんいち）

1950年、山梨県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。思想家・人類学者。明治大学野生の科学研究所所長。チベットで仏教を学び、帰国後、人類の思考全域を視野にいれた研究分野（精神の考古学）を構想・開拓する。

著書に『チベットのモーツァルト』（第6回サントリー学芸賞）、『森のバロック』（第44回読売文学賞）、『アースダイバー』（第9回桑原武夫学芸賞）、『カイエ・ソバージュ』シリーズ〈第5巻『対称性人類学』で（第3回小林秀雄賞）〉、『野生の科学』、『大阪アースダイバー』ほか多数。近著に『熊楠の星の時間』など。アースダイバーをはじめとしたこれまでの研究業績が評価され、2016年5月に第26回南方熊楠賞（人文の部）を受賞。

釋 徹宗（しゃく・てっしゅう）

1961年、大阪府生まれ。相愛大学人文学部教授。博士（学術）。浄土真宗本願寺派如来寺住職。NPO法人リライフ代表。宗教思想や宗教文化の領域において、比較研究や学際研究を行っている。

近著に『死では終わらない物語について書こうと思う』、『お世話され上手』など。